

# 現代教育学における実証主義の問題

——マルティン・ハイデガーの实在論批判を手がかりに——

川 上 英 明

## はじめに

学校教育をはじめとする教育実践において、「何が有効か」(what works)という問いは、常に教育者にとって喫緊の問いである。日々の実践をいかに「よく」すべきか、あるいはどうすれば教育実践は「よく」なるのか。こうした問いの下では、教育者の経験則ではなく、「エビデンスに基づく」研究が求められるだろう。現代教育学において、国際的に台頭している「エビデンスに基づく教育」(Evidence-Based Education: 以下EBEと略記)は、こうした実践レベルの要求に呼応する形で現れた言説であるとも言える<sup>1)</sup>。

しかし、教育という営みがエビデンス(論拠・証拠)のもとで「よい」ものになるという言説において前提されているのは、近代科学によって産出されるエビデンスが教育実践を「よい」方向へと導くはずであるという期待である。ここで問題となるのは、教育と科学の関係性という、それ自体は常に問われ続けてきた問いであろう<sup>2)</sup>。

思想史的な観点から見ると、実証科学に対する哲学/教育哲学の側からの批判は決して珍しいものではない。ただし、そうした批判のそれぞれが、実証科学に対していかなる問題を見出していたのかという点は、論者により異なっていた。本稿は、その中でも、ドイツの哲学者であるマルティン・ハイデガー(Martin Heidegger, 1889-1976)が1920年代前後に展開した実証主義批判に着目するが、それというも19・20世紀の転換期を越え、新カント派認識論のような実証主義的言説が台頭していた思想潮流の中であって、ハイデガーの議論が独自の存在論的思考のもとで展開されていたからである。詳細は本論で述べるが、ハイデガーの実証主義に対する批判の要諦は、実証主義的言説が「实在性」という概念を「物の連関」(Dingzusammenhang)として把握していたという点にあった。この論点は、思想史

的な関心を超えて、現代的な意義を有するものとなるであろう。

以上の問題意識から、本稿は次のように議論を進める。まず先行研究の整理を通して、現代教育学、とりわけEBEが実証主義的な性格を有していることと、従来のEBE批判における論点が、必ずしも「实在性」に焦点化するものではなかったことを明らかにする。次に、ハイデガーが20世紀初頭の認識論に対して向けていた批判の内実を明らかにしたうえで、それが主著『存在と時間』の議論といかに重なるのかを検討する。最後に、以上の議論を踏まえて、現代教育学における実証主義をめぐる問題の提起を、实在性概念の観点から試みたい。

## 1 先行研究の整理

### 1.1 エビデンスに基づく教育と実証主義の重なり

EBEは、1990年代初頭から議論されるようになった「エビデンスに基づく医療」(Evidence-based Medicine、以下「EBM」と表記)というコンセプトから発展したものである。こうした「エビデンス・ベース」という考え方は、90年代後半には社会福祉、教育、刑事司法などの政策と実践に拡大されるようになった(cf. 惣脇 2012: 27)。

そうした中で、1996年に行われたデイビット・ハーグリーブズの講演「研究に基づく専門職としての教職」(Teaching as a research-based profession)が、EBEのさきがけの一つとされている(cf. Oancea & Pring 2009: 12=2013: 18)。ハーグリーブズは、当時の教育研究が5千から6千万ポンドの投資に対して得ることのできる成果が少ないことの理由を、「有効な専門職の実践についての強力なエビデンス」が欠けていることに見ていた(Hargreaves 2007: 8f.)。それゆえ、彼は、当時議論され始めていたEBMを、「教職におけるパ

ラレるアプローチ」として参照することで、「エビデンスに基づく教育専門職」(evidence-based teaching profession)の可能性を提示したのである(Hargreaves 2007: 13)。

EBEの源泉であるEBMは、その背景の一つに、現代社会が知識を最大の資源とする「知識社会」に変化したことを持つと指摘されている(cf. 岩崎 2017: 21)。知識を道具的に捉える知識社会においては、従来、大学などが占有してきた知識が一般へと開放される。このことによって、知識は大量に流通することとなり、その精選と管理に目が向けられるようになった(cf. 岩崎 2017: 21)。「エビデンス」は、このような状況において、知識の有効活用という道具的目的により登場したコンセプトである。

以上のような背景を踏まえると、EBEは、現代の知識社会における情報の精選管理、そして知識の有効活用といった議論に支えられたものであるとすることができる。こうして、ビッグデータによる情報処理や、情報の伝達が迅速に可能になることによって、教育の領域でも、PISAをはじめとするデータの有効性が着目されるようになった(cf. 岩崎 2017: 24)。こうした教育研究は、岩崎久美子(2012)によると、「教育科学」として、その科学的客観性を、主に教育心理学や教育評価の分野によって担保してきた。そのため、エビデンスという科学的客観性を示すものは、「教育科学や実証主義の主張と同一の方向性を持つ」(岩崎 2012: 243)のである。しかし、ここでいう実証主義とは何か。

一般的に「実証主義(positivism)は、科学によって統合された見方への傾倒、および自然科学の方法論を社会的な世界の説明のために採用することを含意してきた」(Smith 1996: 11)と言われるように、自然科学の方法論に関する哲学的立場である。実証主義の中でも、特に「論理実証主義」と呼ばれる立場は、「人間の経験の領域を超えようとする試みを拒絶する」(Clark 2016: 2)。それゆえ、野家啓一(2001)によれば、実証主義は以下のような性格を持つ。

経験的事実のみを知識の唯一の源泉として認め、感覚的経験によって確認できない超感覚的実在や形而上学的実体を無意味として否定するような哲学的立場が「実証主義」と呼ばれることになる。したがって、実証主義は観察と実験に基づく自然科学の経験的方法を知識獲得の最

善のモデルと見なし、人文・社会科学の領域をも自然科学の方法によって統合しようとする強い傾向をもっている。(野家 2001: 4)

このようにして、「形而上学の除去」と「統一科学」という性格を持つ哲学的立場が「実証主義」と呼ばれるようになった(野家 2001: 4)。EBEが実証主義的傾向を持つとされているのは、それが自然科学の方法論によって、人文・社会科学の領域を統合しようとするからである。ともすれば、EBEは人文・社会科学の領域によって説明される教育という複雑な営みを、十把一絡げに自然科学の領域に落とし込んで説明しようとするものとなる<sup>3)</sup>。

こうしたEBEに対して、主に哲学思想の側から批判がなされてきた。次節では、それらの批判の論点を整理したい。

## 1.2 EBE批判の諸論点——イデオロギー性・デモクラシー・「エビデンス」の意味

EBEに対する批判は、昨今でも主に哲学思想の側から提起されている。例えば松下良平は、EBEが有するイデオロギー性を指摘し、その問題点を、真とも偽ともつかないエビデンスに依拠することで有効性あるいは有用性を重視するような教育の問題のことでありと論じている(cf. 松下 2015)。

また、ガート・ビースタも、2007年にEBE批判の論文を発表した。この論文はドイツで出版された論文集である *Wissen, was wirkt* (2011) に独語訳されたうえで収録されたことにも見受けられるように、EBE批判の文脈では影響力を有している(Bellmann & Müller (hrsg.) 2011: 95ff.)。ビースタの批判は、デモクラシーの観点から見たEBEの問題に集約される。すなわち、デモクラティックな社会が「開かれ、情報に基づいた討議の存在」によって特徴づけられるならば、「エビデンスに基づく実践に関する全ての議論が研究の実践的役割についての技術的な期待を持つのみである」という事実は、デモクラシーの観点から見ると厄介な徴なのである」(Biesta 2007: 20; 2010: 46=2016: 71)。

松下もビースタもともに、科学や技術に対する問題関心からEBEを批判するという姿勢は一致している。今井康雄は、こうした近代科学に対する問題を、特に「エビデンス」という概念それ自体の意味を再考するという仕方でも論じている。今井によれ

ば、「エビデンス」概念は、一方では近代科学が産出する「証拠・論拠」としてのエビデンスと、他方ではエドムント・フッサールが論じていたような、生活世界における「明証性」としてのエビデンスに引き裂かれている（今井 2015）。今井の議論は、単に近代科学を批判するのではなく、現代教育学にそれをいかに位置づけ議論するかという可能性を問うているという点で注目に値する。

しかし、以上に見たEBE批判の諸論点は、近代科学の根本にある実証性に対する批判としては機能するものの、実証主義的言説が暗に前提としている「実在性」概念については全く触れていない。ところが次章以下で論じるように、実証主義的言説が前提とする「実在性」の把握は、ハイデガーの観点から見れば多分に問題を含むものであった。以下、本稿では、ハイデガーの実証主義批判がいかなる同時代的背景のもとで現われ、いかなる問題関心の下で展開されていたのかを確認することで、現代教育学における実在性の問題と、ひいては実証主義の問題を論じることができるようになるだろう。

## 2 20世紀初頭の認識論における「実在性」

ハイデガーによる実証主義批判を確認する前に、同時代的な背景を一瞥しておく。そうすることで、ハイデガーがなぜ実証主義を批判するに至ったのかという点の見通しがつきやすくなるだろう。

科学史研究者であるディートリッヒ・フォン・エンゲルハルトは、『啓蒙主義から実証主義に至るまでの自然科学の歴史意識』（1979年）において、19世紀の実証主義的自然科学を次のように特徴づけている。

十九世紀を特徴的づけるのは、三つの補足的観点である。すなわち、第一に「理論的進歩の脱問題化」、次に「神学と哲学に対する徹底的な批判」、最後に「自然科学の宿命化」、つまり人類史と自然科学の発展との同一視である。（エンゲルハルト 2003: 145）

19世紀の自然科学者は、第一に自然科学の技術的・文化政治的成果に直面し、科学的進歩の目標を考慮したり決定したりすることを余計なことと見なす（エンゲルハルト 2003: 145）。その結果、自然科

学の理論的進歩が問題視されるということ自体が無くなる。こうして自然科学が確立されると、神学と哲学は徹底的に批判され、旧来の秩序が逆転し、「神学と哲学は、逆に今や自然科学に左右される」（エンゲルハルト 2003: 148）。こうした自然科学の自己正当化は、「人類史を自然科学の発展と同一視すること、すなわち人間の将来と自然科学の進歩とを同一視することにおいて」完了する（エンゲルハルト 2003: 148）。以上のような特徴をもって、19世紀の自然科学は、神学と哲学を乗り越え、自らを正当化した。

このような19世紀の学問状況、つまり哲学に対する自然科学の優位という状況に対して、ハイデガーは「実在性」の観点から批判を行っていた。その問題意識は、彼の思想家としてのキャリアにおいて初めて公にされた論文に表れている。ハイデガーは、1912年に論文「現代哲学における実在性の問題」を発表しているが、その主たる問題意識は、当時の認識論において支配的であった意識主義と現象主義という現代哲学の繁栄と同時に、自然科学の経験的研究が「健全な実在論」として発展してきたという、哲学的理論と自然科学的実践との分裂の問題であった（GA1, 3）。

この問題意識がさらに深化し、実在性の観点から議論が展開されているのが、1919年戦時緊急学期講義『哲学の理念と世界観問題』である<sup>4)</sup>。この講義においてハイデガーは、実在性の問題を、外界の実在性に関する認識論への批判から考察している。彼はまず、認識論が扱う「感覚データ」（Empfindungsdaten）が事実に与えられているということを問題にする（GA56/57, 79f.）。あらゆる認識論は自然科学に立脚しており、それゆえ認識論における感覚データは自然科学に立脚したものとされる。したがって、認識論における「真正で本来的な実在性とは、学問の客観性である。学問的認識において対象的なもののみが、真の意味で実在的（real）なのである」（GA56/57, 83）。

ハイデガーにとって認識論が自然科学に依拠することの問題は、「自然主義」にあるのではなく、「理論の優位」（Primat des Theoretischen）に存している（GA56/57, 87）。というのは、理論の優位において実在性という概念は、「事物性の本質にみられる、特殊理論的な性格づけ」（GA56/57, 89）だからである。私たちは、理論の優位においては、事物

の実在性へ着目するゆえに、事物が有する意義を「脱－意義化する」(ent-deuten)。そのため、「生」(Leben)は環世界(Umwelt)を生きながら、実在的なものを認識することにおいて、事物の意義を脱－意義化してしまい、「脱－生」(Ent-lebnis)となる(GA56/57, 90)。このように、「生」の観点から実在性を問題視するハイデガーの議論は、実在論への批判として受け取ることができる。

ハイデガーの「生」の概念は、その後、「事実に生」(faktisches Leben)という概念へ発展するものとして知られている。さらに、しばしば指摘されるように、事実に生は、当時の「生の哲学」(Lebensphilosophie)を批判しながら、『存在と時間』における「現存在」(Dasein)という概念へ展開するものである(cf. Campbell 2012: 211; Schmidt 2005: 218ff.)。それでは、『存在と時間』において実証主義の問題は、どのように展開されているのか。

### 3 実証科学に対する基礎存在論の優位 ——『存在と時間』における実証主義批判

『存在と時間』をひもとく前に、1925年夏学期講義『時間概念の歴史へのプロレゴメナ』(以下、『時間概念』講義と略記)を参照したい。というのは、ハイデガーの科学＝学問論が『存在と時間』に直結する形で展開されているのがこの講義であり、ここでは特に19世紀の学問状況を踏まえた議論が展開されているからである。

『時間概念』講義の副題は「歴史と自然の現象学へのプロレゴメナ」と題されている。この講義の目的は、歴史と自然という概念を、それらがもつ学問的な意味、つまり歴史学や自然科学といった意味で捉えることを問い直し、それらの分離を問い直すことである(GA20, 2ff.)。そのためにハイデガーは現象学という手法を用いて、「歴史と自然がそこから始めて取り出される地平(Horizont)を獲得する」(GA20, 7)ことを目指した。この課題のためにハイデガーが問題提起するのは、「存在者の存在について、現実的なものの現実性について、実在的なものの実在性について」という「哲学の根本的な問い」である(GA20, 8)。

ハイデガーは、この問題設定に続いて、当時の学問状況を論じている。ハイデガーによると、19世紀のあらゆる科学＝学問は、「思弁や空虚な概念では

なく経験の事実(Erfahrungstatsachen)という合言葉によって規定されている」(GA20, 14)。こうした事実(Tatsache)への傾倒は、歴史学や自然科学を支配しており、とりわけ当時の心理学で顕著であった(GA20, 15f.)。それゆえハイデガーは、「あらゆる学問分野において、実証主義、「実証的なもの」への傾向が支配している——「実証的」とは事実という意味で理解されているものであり、事実とは実在性への特定の解釈における事実である」(GA20, 16)と主張したのである。これらはオーギュスト・コントにおける自然科学的方法での社会学、およびジョン・ステュアート・ミルにおけるモラル・サイエンス(moralische Wissenschaft)が1850年頃にドイツで受け入れられたことに端を発する傾向である(GA20, 16f.)。1860年代には新カント派によって実証主義の傾向が受け入れられ、それは『純粹理性批判』の実証主義的解釈に展開する。しかしこれもまた、暗黙の内に自然科学における「経験」を前提にしており、カント哲学は「経験の理論」として解釈された。したがって、この場合の「理論とは、科学＝学問の実証主義をカント的に定位した理論である」(GA20, 18)。ハイデガー自身の議論は、科学＝学問の実証主義への傾倒に抗して、哲学に固有の問いである「存在の問い」(Seinsfrage)を仕上げることに向けられている。このように、科学＝学問論の観点からハイデガーの問題意識を整理したことで、本稿は『存在と時間』に結実する彼の議論の意義を示すことができるようになる。

『存在と時間』第3節「存在の問いの存在論的な優位」においてハイデガーは、諸科学、特に実証的な科学に対する存在の問いの存在論的な優位を論じている。存在の意味への問いとしての存在の問いは、元来、プラトンとアリストテレスにおけるウーシア(ούσια)をめぐる問いである(SZ, 2)。ハイデガーによると、ウーシアをめぐる問いは現代では忘れ去られ、諸科学は存在(Sein)の意味を問うのではなく、存在者(Seiende)の意味を問うようになってしまった。「科学＝学問の内的危機」(immanenten Krisen der Wissenschaft)とは、ハイデガーにとっては、個々の科学＝学問がそこから発して事象領域を成り立たせている基礎概念(Grundbegriffe)が探究されていないことを意味する(SZ, 9f.)。諸科学を支える基礎概念への問いとは、まさに存在者の存在の意味への問いである。私たちが「ある」とい

う言葉でつねにすでに了解しているものを問うことこそ、『存在と時間』の根本的な問いである。

ただし、これは諸々の存在論の中の一つに数え入れられるものではない。諸科学が存在者的な位相を問うのに対して、それぞれの領域における存在論もまた存在している。これに対してハイデガーにおける存在の問いは、諸存在論の可能性の条件でもある。

それゆえ、存在の問いは、単に、存在者をかくかくしかじかの存在者として徹底的に究明し、そうしながら、そのつどすでに一定の存在了解のうちを動いているような諸科学の可能性のア・プリオリな条件を目指しているだけではない。それだけでなく、諸科学の可能性の条件が、存在者的な諸科学に先立ち、それらが諸存在論それ自体に根拠を与えるのである。(SZ, 11)

諸科学が可能となるための条件こそ、それぞれの領域の諸存在論を成り立たせるものである。それゆえ、ハイデガーが「存在の問い」に与えていた存在論的な優位とは、諸々の存在論に対しての優位という意味でもある。また、基礎概念を問うという「そのような探究は、実証的な科学に先駆けなければならない、またそうすることができる」(SZ, 10)。このような「基礎存在論」は、あらゆる科学=学問、あらゆる存在論に対して、その基礎概念を問うという仕方では優位にある。これは前節で見たように、ハイデガーの実証主義に対する批判に通ずる議論であり、存在の問いを問うことの優位を主張するための議論でもある。

とはいえ、ハイデガーの実証主義批判は、存在の問いという彼独特の思想の主題において、いかなる意義を持ちうるのか。言い換えれば、存在の問いを問うことにおいては、実証主義におけるどのような点が問題になり、それはどのように存在の問いと関係しているのか。この問いに対して、次章ではハイデガーによる「実在性」概念をめぐる議論を検討し、諸科学が暗黙の内に前提としている「実在性」への懐疑的な視角を導出する。そうすることで、実証主義批判をこえて、現代教育学におけるEBEの問題を考察する視座を用意することが可能となるだろう。

#### 4 延長物と外界の実在性への問い——『存在と時間』における実在論批判

『存在と時間』第43節「現存在、世界性、実在性」において、ハイデガーは実在性という概念を批判的に論じている。この批判は、第19節「レース・エクステンサとしての「世界」の規定」に由来するものであると指示されているため、まずはこの議論を確認しよう。

ハイデガーは第19節において、ルネ・デカルトの「レース・エクステンサ」(res extensa)、つまり「延長物」という概念を検討している。デカルトは、存在者の存在を「スブスタンティア」(substantia)として規定しているが、この概念は一方で「実体 (Substanz) としての存在者、実体性 (Substantialität)」の意味で用いられ、他方で「存在者それ自体、実体 (Substanz)」の意味でも用いられている (SZ, 89f.)。こうして、スブスタンティアは二義性をもつとされるが、ハイデガーは、デカルトがこれらの意味を混合してしまったと指摘する。というのは、デカルトにおける実体性は、実体としての存在者という意味で用いられ、その存在論的な意味が見落とされているからである (SZ, 94)。実体性は、実体と同様に扱われ、その差異が見分けにくくなっている。

ハイデガーによれば、この事態は、デカルトが存在者の存在の意味を避けてしまったことに起因している。デカルトは、世界の内部にある存在者の存在の意味を「事物的存在者」(Vorhandensein)として理解した。そして、「存在とは恒常的に事物的に在ること (Vorhandenheit) であるとする理念」によって、存在者の存在は極端に規定され、存在者と世界全般とが同一視され、現存在すらも物的に捉えられてしまうようになる (SZ, 98)。こうして、存在者の存在は、「物の連関」(Dingzusammenhang)として、つまり「レース」として規定される。ハイデガーは、この規定を、レースとして規定されるという意味で「実在性」(Realität)と解釈している。「その際、身近な手許のもの (Zuhandenen) の存在はやり過ぎされ、存在者はまずもって物的な物の連関 (レース) として概念把握される。存在は、実在性という意味を受け取る」(SZ, 201)。それでは、存在を実在性という意味で規定することの問題は、どの点に存するのか。

ハイデガーは第43節において、「外界」(Außenwelt)の实在性をめぐって議論している。实在的なものが世界の内にいるというテーゼは、そもそも世界なるものの意味を解明しない限り成立しえない。デカルトにおける延長物のように、意識から独立している「外界」の实在性は、世界とは何かという問いの解明を前提とするはずである。ところが事実的に「外界の問題」は、世界の内にいる存在者に定位して提起されている(SZ, 203)。ハイデガーの問題意識はこの点にある。

ハイデガーはこの問題を、『純粹理性批判』の「観念論論駁」のうちに見て取っている。ハイデガーいわく、「私の内」と「私の外」を区別し、「私の外に物が現にある」ということを証明するには、変化と継続を本質とする「時間」を特定する必要がある。そのためには、何か継続的に事物的にあることが前提となる(SZ, 203)。ハイデガーにとっては、この立論そのものが、「主観」(Subjekt)を前提としている議論であり、「私の内」を前提とした議論である(SZ, 204)。それに対して「現存在」は、「世界-内-存在」(In-der-Welt-sein)という存在体制をもつ以上、「私の内」と「私の外」という区別が成立するための存在論的基盤をもっている。こうして、「外界は事物的にあるのか、それは証明可能なのか」という問いの意味での「实在性の問題」は、不可能なものであることが判明する(SZ, 206)。そのような問いは、「世界-内-存在」としての「現存在」の存在体制が解明されないことには、初めから成り立ちえない問いなのである。つまり、現存在が世界の内に存在しているということの存在論的な体制が明らかにされないことには、そもそも外界の实在性の問題を立てることすら不可能である。

ハイデガーは以上の議論を行った上で、实在論を批判する。確かに、「世界-内-存在としての現存在と共に、内世界的な存在者がそのつどすでに開示されている」(SZ, 207)という言明は、外界が實在的に事物的に存在するという实在論のテーゼと一致するようにも見える。しかし、ハイデガーの議論が实在論と袂を分かつのは、両者が存在論を理解しているか否かにかかっている。实在論は、「世界」の实在性が証明できると考えるが、ハイデガーの場合、それら「实在性の問題」が成立しえず不可能なのである。「なにしろ、实在論は、实在性を存在者的に、實在的なものの相互の實在的な作用連関によって解明

しようと試みる」(SZ, 207)。实在論が存在論を理解していないのは、本来、存在論的に解明すべき問題を存在者的な問題として考えてしまうからである。

ハイデガーは、カント哲学を自然科学的な認識論として説明する新カント派への批判を、以上のように、存在論的基礎の看過という形で論じていた。この点は、ハイデガーが新カント派のエルンスト・カッシーラーと論争を繰り広げた「ダヴォス論争」(Davoser Disputation)においても見出すことができる。カッシーラーが「何よりもまず私は数学的自然科学の立場を確かに是認した」(GA3, 275)と述べているように、新カント派においてカント哲学を自然科学に引き寄せて読解する試みは存在していた。それに対してハイデガーは、新カント派を次のように批判している。

私は新カント派の下で、超越論的弁証法まで導く純粹理性の部分を、自然科学に関係する認識の理論として説明する純粹理性批判の把握であると理解している。私にとって問題なのは、ここで科学=学問の理論として取りだされるものが、カントにとって非本質的であったことを示すことである。カントは自然科学の理論を与えようとしたのではなく、形而上学の問題圏、しかも存在論の問題圏を示そうとしたのである。(GA3, 275)

ハイデガーが新カント派に向けていた批判は、このように、カント自身の存在論を看過している点にある。それは、本稿が示してきたように、实在性の問題と通底するものであるが、引用からも読み取ることができるように、科学=学問の問題とも連関している。つまるところ、実証的な科学が前提としている外界の实在性の問題は、ハイデガーにとっては、その基礎概念への問いが欠けているために不可能な問いであるという問題意識に結実するのである。それでは、以上までのハイデガーの実証主義批判と实在論批判の重なりは、本稿にとってどのような示唆を与えるのか。

## 5 考察と展望

すでに確認したように、現代教育学において台頭しているEBEは、その主張の方向性を実証主義と同

一のものとしていた。本稿では、現代の状況を、20世紀初頭の実証主義に対するハイデガーの批判に着目しつつ、それと並行させて考察しようとしてきた。

ハイデガーが論じていたように、実証主義的言説において「実在性」は、「レース」、すなわち「物の連関」と捉えられる。例えるならば、統計などの手法によって数値化されうる諸現象は、人物や事物の作用連関の結果として示されるものであるが、この考え方のもとでは、ある人物の行為やテストの点数などといった数値化されうる諸現象が「実在的」なものとなされ、それらは事物的存在者(Vorhandensein)と見なされる。ハイデガーにとっては、これはデカルト以来の実在性の把握に由来する問題であり、そこでは事物の存在論的な次元が看過されている。それはすなわち、教育を支える存在者同士の関係性の存在論的次元を看過することであり、その関係性を「物の連関」と見なしてしまうという問題である。私たちは、教育を支える「実在性」を概念把握する際に、それを実在論的な「物の連関」として理解するのではなく、その存在論的基礎を見つめる必要がある。

本稿が着目してきたハイデガーの存在論は、現代教育学にとっても意義を有するものであることが示されつつある<sup>5)</sup>。ハイデガー存在論の教育学的可能性は、本稿が示したような「実在性」概念に関するハイデガーの思索と重ね合わせれば、別様の形で展開することができよう。それはすなわち、実在性をいかに把握するかという問いであり、教育の存在論的基盤を再考する問いである。この試みは、EBEをはじめとする実証主義的な教育学的言説に対して、根本的な問いを提起するとともに、いかにして実証的な研究と哲学思想的な研究が協働できるのかという問いをも提起するであろう。これらの問いについては今後の課題としたい。

## 註

1) 本稿では、「エビデンスに基づく教育」を、「エビデンスに基づく政策作成」(Evidence-based Policy Making: 以下EBPM)と区別している。EBPMは、教育との関係においては、とりわけOECD(経済開発協力機構)などのような国際機関が実施するPISAに代表されるようなエビデンスに基づいて、各国の教育政策に影響を与える理念である。エビデンスと教育政策に関する国際的な議

論については、Wiseman & Davidson (ed.) (2018) を参照。

- 2) 例えばドイツの教育学界において実証主義的な研究が論争的になったのは、19・20世紀の転換期における「新教育」運動や、1960年代の「実証主義論争」の影響下であったという歴史がある (cf. 山名 2017: 106)。
- 3) 自然科学と人文・社会科学との複雑な関係性については、金森修による論考を参照されたい (cf. 金森 2004)。
- 4) この講義でハイデガーは「根源学」(Urwissenschaft) という構想を打ち出しており、彼の科学=学問論もこの構想との関わりで考察されなければならないが、本稿では立ち入らない。根源学については齋藤 (2012: 28ff.) を参照。
- 5) ハイデガー思想を存在論として引き受ける教育学的な研究として、田中 (2017)、井谷 (2013)、Thomson (2001) などがある。

## 参考文献

### 【一次文献】

※ハイデガーの著作からの引用に際しては、次の略記号を用い、続いて原著のページ数を示した。強調はすべて原著による。

- SZ = *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, 2006 [1927].  
GA1 = *Frühe Schriften*, Herrmann, F.-W. v. (hrsg.), Vittorio Klostermann, 1978.  
GA3 = *Kant und das Problem der Metaphysik*, v. Herrmann, F.-W. (hrsg.), Vittorio Klostermann, 1991.  
GA20 = *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs*, Jaeger, P. (hrsg.), Vittorio Klostermann, 1979.  
GA56/57 = *Zur Bestimmung der Philosophie*, Heimbüchel, B. (hrsg.), Vittorio Klostermann, 1987.

### 【二次文献】

- Bellmann, J. & Müller, T. (hrsg.) (2011) *Wissen, was wirkt: Kritik evidenzbasierter Pädagogik*, VS Verlag.  
Biesta, G. (2007) "Why "What Works" Won't Work: Evidence-Based Practice and the Democratic Deficit in Educational Research", *Educational Theory*, 57: 1, pp.1-22.  
— (2010) *Good Education in an Age of Measurement: Ethics, Politics, Democracy*, Paradigm Publishers. (藤井啓之・玉木博章訳『よい教育とはなにか: 倫理・政治・民主主義』白澤社、2016年。)  
Campbell, S. M. (2012) *The Early Heidegger's Philosophy of Life: Facticity, Being, Language*, Fordham University Press.

- Clark, K. J. (2016) "Naturalism and its Discontents", in: Clark, K. J. (ed.) *The Blackwell Companion to Naturalism*, Wiley Blackwell, pp.1-15.
- Hargreaves, D. H. (2007) "Teaching as a research-based profession: possibilities and prospects (The Teacher Training Agency Lecture 1996)", in: Hammersley, M. (ed.) *Educational Research and Evidence-based Practice*, SAGE Publications, pp.3-17.
- Oancea, A. & Pring, R. (2009) "The Importance of Being Thorough: On Systematic Accumulations of 'What Works' in Education Research", in: Bridges, D. et al. (ed.) *Evidence-Based Education Policy: What Evidence? What Basis? Whose Policy?*, Wiley-Blackwell, pp.11-35. (柘植雅義ほか編訳「徹底的であることの重要性：教育研究における「何が有効か」についての系統的な蓄積について」ブリッジ, D. ほか編『エビデンスに基づく教育政策』勁草書房、2013年、17-48頁。)
- Schmidt, I. (2005) *Vom Leben zum Sein: Der frühe Martin Heidegger und die Lebensphilosophie*, Königshausen & Neumann.
- Smith, S. (1996) "Positivism and beyond", in: Smith, S., Booth, K. & Zalewski, M. (ed.) *International theory: positivism and beyond*, Cambridge University Press, pp.11-44.
- Thomson, I. (2001) "Heidegger on Ontological Education, or: How We Become What We Are", *Inquiry*, 44, pp.243-268.
- Wiseman, A. & Davidson, P. (ed.) (2018) *Cross-Nationally Comparative, Evidence-Based Educational Policymaking and Reform*, emerald publishing.
- エンゲルハルト, D. v. (2003) 『啓蒙主義から実証主義に至るまでの自然科学の歴史意識』岩波哲男ほか訳、理想社。
- 今井康雄 (2015) 「教育にとってエビデンスとは何か：エビデンス批判をこえて」『教育学研究』第82巻第2号、188-201頁。
- 井谷信彦 (2013) 『存在論と宙吊りの教育学：ボルノウ教育学再考』京都大学学術出版会。
- 岩崎久美子 (2012) 「知識社会における教育研究エビデンスの課題」国立教育政策研究所編『教育研究とエビデンス：国際的動向と日本の現状と課題』明石書店、231-259頁。
- (2017) 「エビデンスに基づく教育：研究の政策活用を考える」『情報管理』第60巻第1号、20-27頁。
- 金森修 (2004) 『自然主義の臨界』勁草書房。
- 松下良平 (2015) 「エビデンスに基づく教育の逆説：教育の失調から教育学の廃棄へ」『教育学研究』第82巻第2号、202-215頁。
- 野家啓一 (2001) 「「実証主義」の興亡：科学哲学の視点から」『理論と方法』第16巻第1号、3-17頁。
- 齋藤元紀 (2012) 『存在の解釈学：ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局。
- 惣脇宏 (2012) 「英国におけるエビデンスに基づく教育政策の展開」国立教育政策研究所編『教育研究とエビデンス：国際的動向と日本の現状と課題』明石書店、25-49頁。
- 田中智志 (2017) 『共存存在の教育学：愛を黙示するハイデガー』東京大学出版会。
- 山名淳 (2017) 「ビルドゥングとしての「PISA後の教育」：現代ドイツにおける教育哲学批判の可能性」『教育哲学研究』第116号、101-118頁。

謝辞：本稿は、2018年7月21日に東京大学にて開催された、JSPS科研費基盤(C)「自然科学の人間観と人間形成論の関係に関する理論的・思想史的研究」(研究代表：今井康雄)の第1回研究会での発表原稿を大幅に改稿したものである。貴重な機会を与えてくださった今井康雄先生、山名淳先生に、この場を借りて御礼を申し上げます。